

完璧なエリート先輩の異常な執着は、ゴミ箱に捨てた私を拾い集め、強制連続絶頂地獄と遠隔クリトリスアクメで徹底管理を始めました

プロローグ

第一章 彼の箱庭

第二章 調律

第三章 強制アクメと意志の剥奪

エピローグ 星野先輩の供給源として

## プロローグ

オフィスに漂うのは、微かな焙煎の香りと、空気清浄機が吐き出す無機質な風の音。その中心、整然と並ぶデスクに……私の神が座っている。

星野先輩。

彼にご執心の私は、その名前を心の中で唱えるだけで、下腹部がじわじわと熱を帯び、同時に鋭い罪悪感に貫かれる。私は、彼の事が好きだった。

今日もカッコイ……。

彼は本当に、いつ見ても完璧だと思う。寸分の狂いもなく結ばれたネクタイの首もと、アイロンのきいたシャツの襟、そしてキーボードを素早く叩いている長く綺麗な指先。彼はこの混沌としたオフィスの中で、私の唯一の癒しだった。

「佐藤さん、この資料の数値、少しズレているよ」

彼に不意に名前を呼ばれ、心臓がトクンと跳ねる。彼の眼鏡の奥にある切れ長の瞳が、私という出来の悪い存在を呼んだ。

「あ、すみません！すぐに修正します！」

慌てて目を伏せる。彼に見つめられると、自分の内側の濁った部分がバレてしまう。昨夜、彼を思い浮かべながら、湿った下着の奥で、自分を慰めていたあの卑しい姿まで、全部を暴かれてしまいそうで恐ろしい。

私のようなとりえのない女が、彼に相応しくないことなど百も承知だ。だからこそ、私は見るだけを選んだ。彼の手の届かない場所で、彼を汚す妄想に耽ること。それが、この乾いた日常で、私を唯一生かしてくれる潤いだった。

彼にとって私は、ただの不出来な後輩の一人に過ぎない。

「……ふう」

彼が小さく吐き出した溜息さえ、愛おしく思う。彼を思う私の事など、誰も知らない。だけど、まさかあんなことになるとは、この時の私は露ほども思っていなかったのだ。

## 第一章 彼の箱庭

出来の悪い私が、廊下で唸っていると星野さんが声をかけてきた。

「どうした？」

「どうしても、仕事覚えられなくて……」

「悩んでるのかい？」

「はい……」

「少し、場所を変えよう。ここだとみんなの目もあつて、落ち着いて話せないだろう？」

「場所を変える？」

「僕の部屋とか」

えっ！！

残業終わりの廊下、星野先輩にそう告げられた時、心臓が口から飛び出すかと思った。

相談に乗るという名目ではあるが、なんと、憧れの人のプライベートな領域に招かれる。それは私にとって、想像もしえない出来事だった。

「でも、いいんですか？」

「いきなり部屋なんて申し訳ないね」

「いえ！ いいんです！」

部屋に誘う……こんな私を。そこで私はふと思う。

私となんて、外で会ったら誰に見られるか分からないもんね……。仕方ないわよね。

辿り着いた彼のマンションは、私の想像とは決定的に違っていた。

「さあ、入って。……狭いけれど」

招き入れられた部屋は、恐ろしいほどに生活感が一切ない。家具はすべて直線的で、床には塵ひとつ落ちていない。清潔すぎて、私の存在そのものが汚れのように感じられ、

ビクビクと身体が萎縮する。

「コーヒーでいいかな？」

「あ、はい……ありがとうございます」

彼がキッチンに立つ間、私は緊張でトイレに行きたくなってきた。

「あの！ おトイレをお借りしても？」

「ああ、廊下に出て左」

「はい」

トイレに行って座り、水を流しながら用を足す。

「来ちゃった……星野先輩の家……」

思わずにやけてしまう。私は下着を上げ、手を洗ってトイレを出た。すると少しだけ、ドアが開いている部屋がある。ダメだとは思いつつ、つい、そつと中を覗いてしまう。



「ちよつと、だけ」

そこには、壁一面を占拠する、ライトアップされた巨大なガラスケース。

趣味部屋？　なんだろう？

吸い寄せられるように歩み寄る。だけどそこにあつたのは、インテリアじゃなかった。

「……え？」

喉の奥がヒュッと鳴る。そこにあつたのは、見覚えのあるもの。私のゴミたちだった。一月十二日、とラベルが貼られた飲みかけのペットボトル。私が先週失くしたはずの、クリップが少し曲がったボールペン。使い古された飾り付きのヘアゴム。

そして。

「これ、私が駅のゴミ箱に捨てた……」

捨てたはずのメモ用紙が、丁寧に伸ばされ、ラベルを貼られ展示されている。

「気づいたのかい」

ドキ！！

背後から、低く温度のない声がした。振り返ると、星野先輩がすぐ近くに立っていた。いつもの柔和な先輩の顔ではなく、獲物を追いつめるような冷徹な目。

「……私が捨てたゴミばかりです。どうして……」

「僕の酸素なんだよ、佐藤さん。……僕はね、これがないと息ができないんだ」

彼は震える私の頬に、熱を帯びた指先を這わせた。じわじわと広がる熱。

「君を構成するすべての要素は、僕の管理下にあるべきなんだ。ペットボトルに残った

君の唾液、このボールペンに付着した君の指脂。ヘアゴムに絡まった髪の毛、君の字。それを見ているとね、僕はようやく自分が生きていると実感できるんだ」

ゾク！

「……あ、あ……」

す、ストーカー……。

恐怖で、足がすくむ。逃げようとする私を先回りするように、彼が耳元に唇を寄せ、重く湿った吐息を吹きかけた。

「君は、自分を価値のない女だと思っているよね？」

「いや、だって！ 私なんて！」

「違うんだ。君は、僕という人間を生かす唯一の供給源なんだよ。……さあ、教えて。今日の君は、どんなごほうびを僕にくれるのかな？」

背筋に冷たいものが降りて来る。彼の指が、耳朵をちゅぷ、ちゅく……と弄り始める。

「ん……ん、っ♡」

「ああ……やつと、本体に触れた」

憧れの人の愛が、まさかこんなにも歪で、こんなにも自分を求めていたなんて。恐怖を塗り潰すように、内側がドロドロと溶け出していく。

ちゅっ♡ ちゅぷ♡ ぺろ♡

「あう♡ あううっ♡ あふ♡ んはあ♡ うあ♡」

彼の指が首筋を這い、私の幻想は音を立てて崩れ去っていった。

## 第二章 調律

リビングに引き戻された私は、引きつりながら星野先輩に言う。

「ひつ、……やだ、離して……くださいっ！」

反射的に背を向けた私の身体は、驚くほど無駄のない動きでソファへと押し倒された。完璧な力加減。抗おうとする私の両手首は、彼の一方の掌だけで容易く封じられる。

「暴れないで。計算が狂ってしまう」

「ど、どういふことです？」

星野先輩は膝で私の腿を割り、その隙間に強引に割り込んできた。彼は空いた手で、スマートフォンを操作し、その画面を私の眼前に突きつける。

「な……これ……」

画面に並んでいたのは、緻密なグラフと数字の羅列だった。私の起床時間、出勤時間、コンビニで買ったものの履歴。私の腕の、スマートウォッチから吸い上げたと思われる、昨夜の睡眠の質まで。

……私のスマートウォッチと……リンクしてる……。

ゾクリ……。

もしかすると、私の全てをモニターしていた？

恐怖で、震えが起きる。

「昨日は睡眠が六時間だったね。生理三日前から、少し肌が過敏になっているはずだ。……あと、これも読ませてもらったよ。君がネットの片隅に垂れ流している、ブログ」

「あつ！　それは！」

頭から血の気が引く。心臓が痛いほどトクトク脈打つを感じる。誰にも言えない、夜の密かな愉しみ。彼に犯される想像や、壊される自分を綴ったあの稚拙な文章まで、彼はすべて把握していた。完全に匿名だというのに、バレている。

「あ……ああ……っ。あ、う……」

彼は、私の腕のスマートウォッチを見る。

「羞恥で体温が上がった。いい反応だよ、佐藤さん。でも、君の妄想は少し甘すぎる。僕の知識の方が、ずっと正確に君を壊してあげられるよ」

彼は、ソファの脇にあるチェストの引き出しを開けた。そこから取り出されたのは、私の想像を絶する、禍々しい器具の数々。それは間違いなく、大人のおもちゃたち。

おちんちんの形をしたゴムの型。電気マッサージ器。みた事も無い流線型の玉。

「それは……」

「君の身体が、僕の管理下でどれだけの快楽を許容できるか、測定させてもらおうよ」

「いやつ、先輩、待って……っ！」

叫びは、彼の冷たい唇によつて塞がれた。

「ん！」

「じつとしていてね」

彼は、その手におもちゃを持った。

「まずは、電マからだね」

「えっ？」

「ほら、ソファアに座って」

ソファに座ると、背もたれにグイッと押し倒される。



「ほら、足をソファーに乗せて」

怖くて足に乗せると、膝を押さえて両側に開かれた。ストッキングをはいた私の足を、さわさわと撫でる。

「ああ……佐藤さんの足」

ゾクッ！

肌が粟立ち、全身が強張る。

「行くよ」

ブウウウウウウウ。

機械の振動音が鳴り響き、彼は冷静な顔で、マッサージ器を私の股間につけた。

びつくりした。物凄い振動で、腰が砕けそうになる。

「うあ！　だめ！　痺れる！　ああ！」

その刺激に、思わず私は足を閉じてしまう。

「こら！　相談に乗ってあげる人に失礼だろう。足を開きなさい」

「で、でも、それ、強いんです……」

「ほら」

グイッと足を広げられて、またマッサージ器をつけられた。

「あ・あ・あ・あ・あ・あ」

ブグウウウウウウ！

おまんこから、腰のあたりまで重い振動が伝わる。

「だ、だめえ！ 変！ ああ！ それ、なんか、我慢できない！」

「我慢しろなんて、僕は言っていないよ」

「は、外して！ 外して！」

「だーめ」

だけど、じんわりと快感に変わってきた。なぜか、もつとしてほしくなった。

「ううう。あつ、あは♡」

「良くなった？」

「う、で、でも！ ああ！」

ぴとりと、ピンポイントでクリトリスの上に固定された。一気に、快感が膨らむ。